

コミュニケーション行動評価概念の日中韓露比較： 大学生に対する調査に基づいて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30217

コミュニケーション行動評価概念の日中韓露比較

—大学生に対する調査に基づいて—

陶 琳・尹 秀美・西嶋 義憲

0. はじめに

日本・中国・韓国・ロシアといった環日本海地域では現在、経済協力関係がより緊密になり、当該地域間の人物交流はますます盛んになってきている。それに伴い、このような地域において社会的文化的背景の異なる者どうしが接触する機会が増大し、その結果、異文化間のコミュニケーションとして誤解が日常的に起こるようになってきている。誤解は、対話相手の用いる言語知識が互いに不足していること以外に、文化や社会によって異なる規範や価値体系が原因となることもある。近年、対人配慮行動（ポライトネス）との関連でそのような社会的文化的背景の違いを明らかにするために、対人配慮行動にかかわる語彙に着目してコミュニケーション行動評価概念（evaluating concepts of communicative behavior）の対照意味論的研究が行なわれるようになってきた。コミュニケーション行動評価概念とは、たとえば、「丁寧な」「礼儀正しい」「生意気な」「馴れ馴れしい」といった、コミュニケーションにおいて当該社会で通用している対人配慮行動の規範を背景に、相手や自分の行動をメタ・コミュニケーション的に肯定的ないし否定的に評価する概念のことである。本研究では、日本語・中国語・韓国語・ロシア語の対応するコミュニケーション行動評価概念の比較を通じて、各言語社会で通用している対人配慮行動の異同を明らかにする¹。

1. 先行研究

1.1. コミュニケーション行動評価概念とは

どの言語にも社会的行動を肯定的に、また、否定的に評価するメタ・コミュニケーション的な表現がある。例えば、日本語には「丁寧な」「生意気な」「気さくな」、中国語には「有礼貌」「傲慢」「坦率」などの語彙がある。これらは社会的相互行為の背後にある行動規範や価値観を参照しながら評価する概念を表わす。また、行動規範にそった行動は、「当たり前」「自然」「普通」と評価され、コミュニケーションにおける「通常性」を構成する。そして、そのような「通常性」から逸脱した行動が肯定的・否定的に評価されるのである。そして、ある言語のコミュニケーション行動評価語彙を収集・分析することにより、それを使用する当該社会で通用している「通常性」を明らかにすることができる。

「通常性」は個別文化的である。コミュニケーションが「当たり前」に進行しているとき、われわれが何に注目して行動しているのかは自明過ぎてわかりにくい。ところが、個

¹ 本報告は、平成 22 年度金沢大学インセンティブ研究経費による研究成果の一部である。

別文化ごとの「通常性」を比較することにより、それぞれの文化でとりわけ何に注目しながら行動しているのかがわかる。それによって、対人配慮行動の背景にある協調行動の個別文化ごとの違いあるいは「通常性」の違いを明らかにすることができる。

1.2. 対照研究

コミュニケーション行動評価概念の研究は個別言語だけでなく、二つの異なる言語間の対照としてもなされてきた。これまで、日米、日独、日韓、日中について研究がなされている (Ide, Hill, Carnes, Ogino, & Kawasaki, 1992; Marui, Nishijima, Noro, Reinelt, & Yamashita, 1996; 南・西嶋・斉木, 2006; 陶, 2010)。これらの調査によって示唆された主な点については、たとえば、日米ならば「親しげな (friendly)」行動が両言語で全く異なる価値をもつことが指摘された。日独に関しては、ドイツ社会においては社会的距離よりも心理的距離として親・疎が重要であることが明らかにされた。日韓では、親しい関係にある人物どうしの行動に大きな違いが認められた。日中では、中国社会は社会的距離よりも心理的距離に関わる親しさが重要な役割を演じていることがわかった。このように日米や日独のように地理的にも文化的にも遠い関係にある社会ではもちろんのことだが、地理的に近く、歴史的文化的な背景を共有している日本・中国・韓国間においても異なる行動規範が通用していることが明らかにされてきている。本研究は、その東アジア圏を出発点に対象領域を広め、ロシア語社会を含めて、コミュニケーション行動評価概念の使用を4言語間で相互に比較し、それぞれの言語ごとに配慮すべきポイントを探る試みである。

2. 調査方法

2.1. 方法

本研究の調査は、記入式アンケート調査法によった。短期間で比較的多量のデータを収集できるからである。アンケート調査のために、心理的距離と社会的距離という2つの尺度の組み合わせにより、3タイプの対話相手を設定した。具体的には、1) 親しい同年齢の友人 (「親友」もしくは「場面1」と略記する)、2) それほど親しくない同年齢の友人 (「同級生」もしくは「場面2」と略記する)、3) かなり年輩でそれほど親しくない教授 (「教授」もしくは「場面3」と略記する)、という3タイプである。日本人・中国人・韓国人・ロシア人の大学生を被験者として、これらの人物を想定してもらい、その人物と話すときにとくに考慮する概念はどれかを尋ねた (cf. Marui *et al.* 1996)。

調査した概念は日本語ではつぎの8つである：①「ざっくばらんに話す」、②「丁寧に」、③「親しみを込めて」、④「礼儀正しく」、⑤「気楽に」、⑥「立場をわきまえながら」、⑦「相手を傷つけないように」、⑧「距離をおかずに」。

これらの概念およびその中国語・韓国語・ロシア語対応概念を利用して、現代の日本人大学生、中国人大学生、韓国人大学生、ロシア人大学生はポライトネスに関するコミュニケーション行動評価概念についてどのような意識を持っているのか、現代社会の人間関係の中でどのような価値を置くか、といった点をアンケート調査によってデータを収集した。

2.2. 実施時期と場所

2008年11月、2009年3月から6月および2011年3月まで、アンケート調査を行った。調査実施場所は日本国内では神奈川大学をはじめ、金沢大学、富山大学であり、中国国内では北京第二外国語大学と北京工業大学である。韓国国内では東亜大学、ロシア国内では極東国立人文大学である。

2.3. 調査対象

回収できた回答数は、日本人212名(男88、女124)、中国人160名(男58、女102)であった。男女の母数に差があるので、日中それぞれの中から男女各50名ずつ合計100名のサンプル抽出を実施した。韓国人100名(男49、女51)、ロシア人25名(男性13、女性12)である。

3. 結果

3.1. 評価概念の3場面との相関

これら8つの概念は場面による分布が異なりそうなものを選択してある。大雑把には、心理面と社会面という二重の観点で差のある場面3(教授)に関わる概念、その差のない場面1(親友)に特に関わる概念、そして場面に関係なく3場面に共通して考慮される概念の3タイプが基本になると予想される。なお、場面2(同級生)にとくに結びつくような概念はなかった。予想は上記3タイプであるが、特定の概念と3場面との関連は、論理的につぎの5タイプが想定可能である。

タイプ1：場面1(親友)で特に考慮され、逆に場面3(教授)ではそれほど考慮されない概念。すなわち、社会的距離に差がなく親しい関係において考慮される。

タイプ2：場面3(教授)で特に考慮され、逆に場面1(親友)ではそれほど考慮されない。すなわち、社会的距離についても心理的距離についても差がある関係において考慮される。

タイプ3：3つの場面で等しく共通に考慮される。

タイプ4：場面1(親友)と場面2(同級生)・場面3(教授)の対立として、親しいか親しくないかが基準となるもの。

タイプ5：場面1(親友)・場面2(同級生)と場面3(教授)の対立として、社会的距離の有無が基準となるもの。

これらすべてのタイプに出現するわけではない。調査結果によると、予想通り、タイプ1・タイプ2・タイプ3の3つのいずれかに分類されるようだ。

タイプ1：「ざっくばらん」「親しみをこめて」「気楽に」「距離なく」

タイプ2：「丁寧に」「礼儀正しく」「わきまえ」

タイプ3：「傷つけない」

² ロシアでの調査は、ブシマキナ・アナスタシア氏(金沢大学大学院)の協力により実施できた。記してお礼申し上げる。

3.2. 結果と分析

日本・中国・韓国・ロシア人大学生に対して、1)場面1（親友）・2)場面2（同級生）・3)場面3（教授）という3タイプの対話相手について質問した結果は表1に示してある。

表1 日中韓露大学生の評価概念の結果

項目	場面1（親友）	場面2（同輩）	場面3（教授）
ざっくばらんに	61.0%	24.0%	3.0%
直言不讳	67.0%	10.0%	18.0%
솔직하게	95.0%	40.0%	31.0%
Atkravenna ...	100.0%	58.3%	4.0%
丁寧に	28.0%	71.0%	96.0%
很有礼貌	44.0%	90.0%	98.0%
정중하게	34.0%	90.0%	98.0%
Vejliva...	80.0%	95.8%	100.0%
親しみを込めて	82.0%	48.0%	34.0%
平易近人	70.0%	77.0%	63.0%
친근하게	96.0%	56.0%	34.0%
Drujelyubna...	96.0%	95.8%	88.0%
礼儀正しく	17.0%	63.0%	97.0%
遵循礼仪	38.0%	82.0%	96.0%
예의바르게	37.0%	90.0%	98.0%
Sleduya pravibam ...	36.0%	60.9%	96.0%
気楽に	99.0%	43.0%	8.0%
轻松	87.0%	25.0%	12.0%
편안하게	100.0%	45.0%	14.0%
Legko i neprinujdyonna	100.0%	29.2%	16.0%
わきまえ	35.0%	72.0%	98.0%
知道自己身份	56.0%	86.0%	90.0%
입장을 구별하며	74.0%	83.0%	96.0%
Asazbavata...	20.0%	12.5%	84.0%
傷つけない	80.0%	93.0%	81.0%
不伤害对方	76.0%	93.0%	86.0%
상처를 주지 않도록	82.0%	98.0%	96.0%
Starayas' ...	79.2%	100.0%	96.0%
距離なく	81.0%	28.0%	10.0%
不保持距离	59.0%	14.0%	11.0%
거리낌 두지 않고	81.0%	23.0%	14.0%
Ne sazaavaya...	84.0%	16.7%	16.0%

傾向としては大雑把に上記 3 タイプに分けられるが、詳細に見ると、言語によってその分布が異なるようだ。本研究では、その分布の差に注目し、概念ごとに各言語の異同を明らかにしてみたい。

3.2.1. 「ざっくばらん」

これは、場面 1 (親友) で頻繁に考慮されるが、場面 3 (教授) では重視されない概念である。韓国語とロシア語においてとりわけ顕著に考慮されている。韓国社会では、特に親友や家族に対して「ざっくばらんに」話すことは非常に評価が高い概念であると考えられる。対話相手が教授の場面 3 でも 4 カ国中、韓国が一番高い。日本語と中国語は場面 1 (親友) では、どちらかというと考えすべき概念といった扱いであることから、両言語文化では、親しいからといって、必ずしも遠慮なく話すというわけではないようである。中国文化では、基本的に、「直言不讳」は高い評価を受ける。ただし、適切な方法で言わないと、人を傷つける可能性があるため、心理的に遠慮があると考えられる。

3.2.2. 「丁寧に」

これは本来、場面 3 (教授) においてもっとも考慮されるはずのものであるが、実際は、どの言語についても場面 2 (同級生) においてもかなりの頻度で考慮されるようだ。しかも、ロシア語については、場面 1 (親友) においても注目されている。この点から、日本語、中国語、韓国語では、ロシア語と異なり、「丁寧に」は親しいか親しくないかが対人行動の違いに関わる重要な基準であることがわかる。

3.2.3. 「親しみを込めて」

これは、親しい間柄でもっぱら考慮されると考えられるので、場面 1 (親友) に集中すると予想されるが、実際、どの言語でもそのような傾向が確認できた。しかし、面白いことに、「丁寧に」の場合と同様に、ロシア語は場面に関係なく、この概念は常に考慮されるようである。また、中国語も値はそれほど高いわけではないが、場面 1 (親友) と場面 2 (同級生) が同程度に考慮され、場面 3 (教授) においてもどちらかというと考えするような結果になっている。ロシア語と中国語は、英語圏と同傾向を示すという印象を受ける。中国社会では「平易近人」が対人行動において高い評価を受ける。特に目上は目下に、また教師は学生に、年上は年下に、親しい人は親しくない人に「親しみを込めて」行動すると、高い評価が得られるとされることと関係している可能性がある。

3.2.4. 「礼儀正しく」

この概念は、心理的にも社会的にも距離のある人物を想定する場面 3 (教授) で頻繁に考慮されるものであるが、実際、どの言語でも場面 3 で高い割合で考慮されている。ただし、中国語と韓国語は場面 2 (同級生) においても頻繁に考慮されるようだ。このことは、中国語と韓国語は、場面 1 (親友) と場面 2 (同級生)・場面 3 (教授) の区分、つまり、

親しいか親しくないかが礼儀に関わる対人行動にあつては重要な観点になっていると解釈できる。中国社会では、親しくない人、目上の人、年輩の人に対して礼儀正しい対人行動を期待する。例えば、子供を連れてくる親は、町で自分の同僚に会うと必ず、自分の子どもに相手を「叔叔（叔父さん）、阿姨（叔母さん）好（こんにちは）」と言わせる。もし、その子供がそう言わない場合、親は必ず「这孩子真没礼貌（この子はほんどに礼儀正しくないね）」と言う。

3.2.5. 「気楽に」

この概念は、親しい間柄で考慮されるものと予想される。事実、どの言語でも場面1（親友）で頻繁に考慮されているという結果となっている。場面2（同級生）と場面3（教授）では注目度が低いことから、この概念の使用は、4言語に共通して、親しいか親しくないかが重要な観点になっていることがわかる。

3.2.6. 「わきまえ」

これは、相手との社会的な関係を考慮する概念なので、「丁寧」や「礼儀正しい」と同様に、場面3（教授）でとりわけ頻繁に考慮されると予想される。実際、場面3で顕著に考慮されている。ところが、日本語・中国語・韓国語では場面2（同級生）においてもかなり頻繁に考慮され、韓国語にいたっては場面1（親友）においてさえ重視されていることがわかる。韓国社会では、社会的立場だけでなく、個人の心理的立場まで考慮に入れるため、親友においても高い比率を示すことになると考えられる。東洋文化圏では、とりわけ親しくない相手に対して、この概念が考慮されていることがわかる。ロシア語では場面1（親友）と場面2（同級生）ではほとんど考慮されていない。すなわち、「わきまえ」は場面3（教授）という親しくなく社会的身分差がある人物に対してのみ有効な概念であることがわかる。

3.2.7. 「傷つけない」

親しいわけでもなく、また、社会的に明確な差があるわけでもないという点で、あいまいな位置づけにある人物を相手にする場面2（同級生）で顕著に高くなると予想されるが、たしかにそのような結果となっている。しかし、その他の場面1（親友）と場面3（教授）でもかなり頻繁に考慮されている。すなわち、どの言語にあつても、どの場面でも重視される概念であることがわかる。少なくとも4言語に共通して重視される一般的な配慮概念であるようだ。つまり、対人行動において「傷つけない」という配慮は基本的かつ重要な概念と言えよう。

3.2.8. 「距離なく」

これは、「ざつぱらん」「気楽に」と同じように、親しい間柄で考慮される概念であるが、それを肯定する結果となっている。場面2（同級生）と場面3（教授）ではほとんど注目されていない。中国語をのぞいて、場面1（親友）で頻繁に考慮されている。中国語は6

割弱の数値なので、どちらとも言えないという傾向を示している。実は中国人は、親しい人物を相手にする対人行動においても、どの人に対しても同様に接するとは限らないようだ。時に自分の立場や実際の状況により、例えば「親兄弟明算帳（兄弟でも明らかに清算しなければいけない）」と言う諺が示せずように、距離を置くことがある。

3.3. 日中韓露の評価概念の考察

結果の有意性についてはANOVA検定を行なった。以下の考察はそれに基づく。

全体的には、場面1（年齢差がなく親しい相手、親友）と場面3（年齢差があり親しくない相手、教授）がシンメトリカルに対立する傾向にある。しかし、中国人と韓国人については場面1（親友）と場面2（同級生）・場面3（教授）のセットが対立する傾向が見て取れる（たとえば「丁寧」「礼儀正しく」「わきまえ」）。これらの概念は、場面2（同級生）・場面3（教授）という親しくない人物が相手の場合に共通して配慮されることがわかる。ロシア人は、「丁寧」と「親しみ」について、3場面とも高い数値である。これは、東アジア圏の国々出身者と明確に違う点である。

3場面共通して日中韓露とも高い割合を提示する概念として「傷つけない」がある。3場面の中でも、とりわけ頻繁に考慮されるのは場面2（同級生）である。つまり、同年齢だが親しくないという、親しいわけでもなく、だからと言って、明確な社会的距離（目上、目下）の差があるわけでもないといった、いわば中途半端な関係にある人物に対して、「傷つけない」が重視されるようだ。

以下では、評価概念と3場面との相関関係について考察する。

3.3.1. 場面ごとの4言語共通概念

場面1（年齢差なく親しい相手、親友）について：

「親しみを込めて」「気楽に」「傷つけない」

場面2（年齢差なく親しくない相手、同級生）について：

「丁寧に」「傷つけない」

場面3（目上で親しくない相手、教授）について：

「丁寧に」「礼儀正しく」「わきまえ」「傷つけない」

3.3.2. 場面1（親友）の日中韓露比較

「ざっくばらんに」「親しみ」：

韓国人・ロシア人>日本人・中国人

「丁寧」：

ロシア人>日本人・中国人・韓国人

「距離なく」：

日本人・韓国人・ロシア人>中国人

「礼儀正しく」：

中国人・韓国人・ロシア人>日本人

「わきまえ」

韓国人 > 日本人・中国人・ロシア人

→ 韓国人は、親友（場面1）に対して、3.2.6.でも指摘したように、「ざっくばらんに」かつ「わきまえをもって」接するという特徴的な行動をとるようだ。

3.3.3. 場面2（同級生）の日中韓比較

「ざっくばらん」

韓国人・ロシア人 > 日本人・中国人

「丁寧に」

中国人・韓国人・ロシア人 > 日本人

「礼儀正しく」「立場をわきまえながら」：

中国人・韓国人 > 日本人・ロシア人

（中国人と韓国人は、場面2（同級生）と場面3（教授）で差なし）

「親しみを込めて」：

中国人・ロシア人 > 日本人・韓国人

「気楽に」：

日本人・韓国人 > 中国人・ロシア人

→ 中国人は同級生（親しくない同輩、「疎」の人物）については、親しみを込めながらも、ざっくばらんでなく、気楽でない傾向がある。「疎」の人物に対する遠慮があると言える。

3.3.4. 場面3（教授）の日中韓露比較

日中韓露で、あまり大きな差は認められない。

「ざっくばらん」

韓国人 > 日本人・中国人・ロシア人

「親しみ」

ロシア人 > 日本人・中国人・韓国人

「わきまえ」：

日本人・韓国人 > 中国人・ロシア人

「傷つけない」：

韓国人・ロシア人 > 日本人・中国人

3.4. まとめ

中国人は、場面1（親友）のような親しい間柄でも丁寧に行動し、距離を置こうとする。韓国人は、親しい相手にはざっくばらんに、より親しみをもって接触しようとする傾向があるが、わきまえもある。ロシア人は、どのような相手に対しても丁寧に、親しみをもって、傷つけないよう行動する。場面2（同級生）のような、社会的な距離はないが親しくない人物に対して、中国人と韓国人は丁寧に礼儀正しく、わきまえをもって振舞おうとする

る。場面3（教授）のような、心理的・社会的という二重の意味で遠い相手に対しては、特筆すべき差は認められない。4言語とも同様にふるまう。

4. おわりに

環日本海地域に属する日本、中国、韓国、ロシアでは、対応するコミュニケーション行動評価概念の使用に関して、もちろん共通点もあるが、相違点もかなりあることがわかった。日本・中国・韓国はその歴史的経緯から文化的背景を共有しているため、対人コミュニケーションの仕方も同様であろうと考えがちである。逆にロシアは東アジア圏の3国とは文化的背景が異なるので、振舞い方も違う傾向を示すものと予想される。ところが、本研究が示唆するように、このような考えが思い込みに過ぎない場合もあることがわかった。コミュニケーション行動評価概念の対照研究は、日中韓露間の異文化間コミュニケーションにおける期待のズレを説明するのに有効であることを示唆する。

今後は、男女差や別のタイプの人物を相手とする場面を含めた調査や語場を利用した語彙意味論的調査、さらに語彙化されていない慣用表現との相互関連、談話場面での評価概念の使用といったより広い観点からの調査も必要であろう。また、評価概念間の関係も精査する必要がある。

また、敬語体系がある言語とない言語に分けて分析するのも面白いかもしれない。特に「丁寧に」や「礼儀正しく」において、たとえば、敬語体系がある韓国語や日本語は敬語を使うこと自体がすでに礼儀正しく丁寧なことであるため、中国語に比べてあまり配慮する必要がなくてもいいのかもしれない。また、同じ敬語体系がある日本語と韓国語でも、あまり親しくない同級生（場面 2）において、敬語を用いるかどうかについて異なる傾向があるので、敬語の用法の影響がある可能性もある。

参考文献

- Ide, S. / B. Hill / Y. M. Carnes / T. Ogino / A. Kawasaki (1992): "The concepts of politeness: An empirical study of American English and Japanese." In: R. J. Watts / S. Ide / K. Ehlich (eds.): *Politeness in Language: Studies in its history, theory, and practice*. Berlin etc.: Mouton de Gruyter, pp. 281-297.
- Marui, I. / Y. Nishijima / K. Noro / R. Reinelt / H. Yamashita (1996): "Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German." In: M. Hellinger / Y. Ammon (eds.): *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, pp. 385-409.
- 南相璽・西嶋義憲・斉木麻利子 (2006): 「ポライトネス・グラマー —— コミュニケーション行動評価概念の日韓比較 ——」. In: 『金沢大学留学生センター紀要』第9号, pp. 1-19.
- 陶琳 (2010): 「コミュニケーション行動評価概念「思いやり」の日中比較」『神奈川大学言語研究』第32号, pp. 93-108.

(金沢大学)